

『温泉での出来事』

ひと昔前は、といってもそう古い時代のことではないが毎日お風呂に入る習慣はなかったといっ
ていい。自宅にお風呂を持つ家は多くなかったからだ。皆、銭湯に通った。

私の生まれた道南の町でも町内に7～8軒の銭湯があったと記憶している。夕方になれば随分と
混雑していたものだ。当然、銭湯は無料ではない。毎日家族全員が銭湯通いをするとなると積もり
積もって大きな出費となる。私が記憶している一番安かった頃の料金は子ども10円というもの。
入浴は夏場は何日かに一回、冬になると週に一度程度が庶民のお風呂感覚だった。

私が町の銭湯に出かけたのは年にほんの数回。「官舎の風呂」が故障して使えない時のみ出かけ
た。「官舎の風呂」は銭湯ではない。国鉄の官舎に住んでいた私たち家族は、「官舎のお風呂」のお
世話になった。もちろん銭湯のようにお金を木戸で払うわけではない。当時の国鉄職員の互助組織
が運営していたのであろう。知り合いの叔母ちゃんがお風呂の運営を任されていた。

そのお風呂も毎日開いているわけではなかった。週に2～3回。曜日がだいたい決まっていた。
戸を開けると下足置き場があり、そこを上がるともう脱衣場。脱衣場は木の棚がいくつもあった。
小さい頃だったから大きな棚に見えたが、3段で横に10列、計30もあっただろうか。が、中は
狭い洗い場に小さな湯船、12～3人も入ると混雑状態の共同浴場だった。

私たちはそこで育ったといえれば大げさに聞こえるが、今振り返ってみると地域の方々による地域
の子供の教育の場であった等と、貧しくはあったがよい時代がそのときにあったことが懐かしく思
い起こされる。

知り合いの大人の方が多くいたので、脱衣の使い方、お風呂の入り方等等、だらしないときには
注意されたものだ。時には子ども達だけで遊んでいてカツを入れられたこともある。入浴を共にし
ながら学校での様子、日常の遊びのことなどなど、聞かれたものだ。

孫を連れて東室蘭駅近くの温泉に入っていた時のことである。私を含め大人が12～3人ほどが
中にいた。そこに5人の子ども達がまさに「ドヤドヤ」という感じで、脱衣場から洗い場の中に入
ってきた。年恰好からして上は小学5年生を頭に6人。下は2年生か？兄弟でもなさそうだ。

さっと体を洗い、湯船につかった。子ども達だけどなかなか上の学年の子が下の子の面倒を見て
いるなど見守っていたのは私だけではない。他の大人たちも好奇心の眼差しをもって子ども達を見
ている。私が当の子ども達にも次に何をしてくれるか関心があったが、もっと興味をもったのは子
ども達を見ている大人たちの様子であった。

私の子ども時代のお風呂の様子は冒頭に記した。今家庭の風呂が主流で、今回のように温泉等で

子ども達だけの群団をみかけることが少なくなった。都会の銭湯や町場の温泉には今もある光景なのかも知れないが、私のように田舎暮らしの者には昔懐かしい景色だった。

さて、続きがある。子ども達はだんだん調子が出てくるにしたがって、遊びだした。大人達の表情の面白いこと面白いこと(こんな観察をしてしまうのは身についた職業病が今も直っていない証拠であるが...)。ある方は「オレも昔はああだった」という風にゆったり顔で見守っている。ある方は見ても見ぬふり、我関せず。一番気になった方は、だんだん顔色が変わっていく方も。ついにその方が、湯船に飛び込む仕草を見せた子ども達をしかってくれた。子どもたちは素直に非を認めるとともに、その後静かに入浴を続けた。

今も子ども達をしっかりと叱ってくれる大人がいることに安堵する一方、叱られた後の子ども達を優しく見守る大人たちの目があったこともうれしかった。自分の子どもをしっかりと叱れない親が多くなったと聞く。物事の善し悪しはその時々には学ばせるべし。子育てに地域が関わっていくという意志を改めて学ぶことができた時間だった。